

谷口吉生の美術館における展示空間の設計手法

Design Method of the Museum exhibition rooms designed by Yoshio Taniguchi

安田研究室 05M17289 山口 梓

1. 序

1-1. 研究の目的と背景 近年の美術館建築において、外観やランドスケープ、展示室を結ぶ回廊などの展示室まわりの空間、または展示室の配置関係に対する提案は多種多様である。その中で美術館本来の目的のため展示室は最も重要な空間であり、これらについて考察することは、美術館建築の研究にとって有効であると考えられる。本研究では、ニューヨーク近代美術館をはじめ美術館建築の設計を多く手がけている谷口吉生の作品をとりあげ、それらの特徴が顕著に表れていると考えられる展開図を用いながら、展示室内に立つ人の視点からみた展示空間を分析することによって、谷口の展示室に対する設計手法の特徴の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 展示空間の各面における面の構成

図面に表記された室名をもとに、平面的に限定された空間を1展示空間として扱う。本章では、展示室内に立つ人に大きな影響を与えると考えられる床・壁・天井の展開図に着目し、それらの特徴についての考察を行う。

2-1. 面に対する操作 展開図の各面について分析を行ったところ(図1)、表2に示すような様々な形態をもつ切り欠きと開口が見られた(以降、この2つを総称して抜けと呼ぶ)。壁面に関しては、面の隅が切り取られる切り欠き-端部が最も多く見られ、その中でも切り欠き-端部-側部が多い。これはこれは動線上で出入口としての機能を有する入口型よりも多く採用されていることが明らかになった。この形態の特徴は天井高と同じ高さの開口であり、切り欠き部分の上部は出入口等動線の目的とは異なるため、この開口は隣接空間と視覚的に結びつけるということを重要視しているものと考えられる。面に対する操作において、正方形や長方形等の矩形だけを使うという単純な構成に終始していることも特徴である。天井面においては立面同様に端部の切り欠きによるトップライトが多く、次に開口型のトップライトが続く。床面は端部切り欠きと一辺が接した開口型による吹抜が使われている。

表1 対象とする美術館

no.	美術館名	竣工年	建築面積	延床面積	展示室数	展示室以外の公開室数
1	資生堂アートハウス	1978	1,261.6㎡	1,416.8㎡	4	1
2	土門拳記念館	1983	1,762.93㎡	1,754.23㎡	4	2
3	長野県信濃美術館東山魁夷館	1990	1,093.09㎡	1,697.97㎡	4	2(3)
4	丸亀市猪熊弦一郎現代美術館	1991	3564.80㎡	11,413.95㎡	3	2(3)
5	豊田市美術館	1995	6194.67㎡	11,238.41㎡	14	5
6	東京都国立博物館法隆寺宝物館	1999	1934.50㎡	4,030.55㎡	7	4
7	ニューヨーク近代美術館	2004	7,300.00㎡	61,000.00㎡	5	3
8	香川県立東山魁夷せとうち美術館	2004	715.16㎡	853.15㎡	2	2

表1註) 現在までに竣工されている谷口吉生設計による8つの美術館を取り上げ、中でも図面と室内の写真より十分な情報が得られるものを対象とし分析を行う。

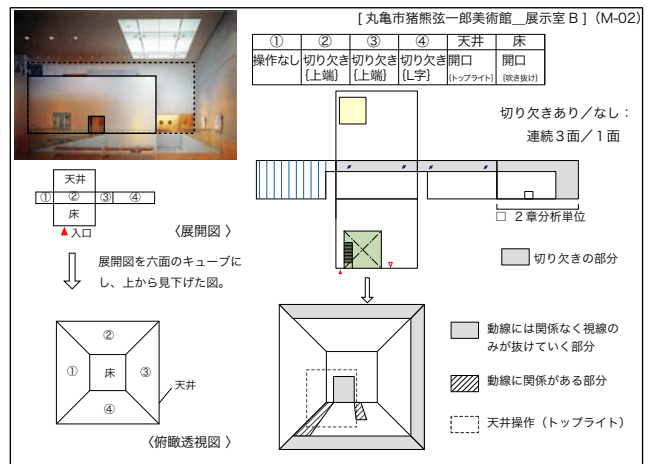


図1 分析例

表2 各展開図に見られる操作

	切り欠き					開口 (7)	その他
	端部 (57)	L字	中央	門型	開口		
壁面	(31)	L字L字に抜ける(6)	(16)	(18)	(5)	入口型 (26)	入口型 (26)
上端	(13)	上角L字に残る(2)			(2)	全面 (7)	全面 (7)
下端	(13)	下角L字に残る(28)				操作なし (74)	操作なし (74)
天井面	(17)				(11)	操作なし (22)	操作なし (22)
床面	(2)	(2)			(3)	操作なし (41)	操作なし (41)

表3 面の構成

	面の分割のみ (146)			挿入のみ (40)		
	側部 (74)	下 (12)	両 (3)	下角 (19)	入 (18)	開 (2)
壁面	(18)	中 (10)	門 (7)	上角 (1)	開 (2)	
上 (10)	L (5)	全 (7)				
組み合わせ	側+中 (2)	側+開 (1)	下+開 (3)	側+開+下角 (1)	入×2 (2)	
	側+下 (2)	側+下角 (1)	両+入 (1)	側+中+下角 (1)	下角×2 (2)	
両+中 (1)	下+下角 (1)	側+入×2 (1)	門+入 (1)	入+下 (1)		
			門+入×2 (1)	入+上 (1)		
			L+角 (1)	入+上角 (1)		

2-2. 各面における操作の組み合わせ さらに各面における操作の組み合わせ(表3)をみることにより、面の構成について考察を行った。面の分割手法と、そこに入口や開口といった要素が挿入されることにより各面が構成されていることが明らかになった。分割や挿入が組み合わせたり構成される面より分割のみや挿入のみの単独で現れる面が数多く(24:186)、内部空間の簡潔化、形態の単純化を追求する谷口の展示室内部に対する設計手法が見てとれる。

3. 展示空間における面の操作

3-1. 面と面に対する操作の関係 各展示空間の床・壁・天井の6面に加えられた操作の関連について見ると、表4より、操作されていない面が多い展示空間は、端型のトップライトが使われることが多く、操作されている面が多く、トップライトがある展示空間は水平ラインを強調するような立面の操作が多く使われていることが分かる。また天井操作がなく立面の操作面が多いものには垂直ラインを強調するような操作がなされているものもみられた。吹き抜けとトップライトの関係に注目すると、吹き抜けとトップライトの場所が一致し、吹き抜けに光が落ちるように設計されていることが確認された。

3-2. 面の操作と展示空間の開放性 2章で得られた「面」に対する操作は、動線のための単一目的と動線以外の目的とに大きく二つに分類される。そこで、展示空間を構成する面の中で、動線のための操作がなされている面と動線以外のための操作がなされている面との割合について検討を行った。表5より動線以外のための操作が行われている展示空間が動線だけの操作で作られている展示空間よりも、はるかに多く存在することが明らかになった。(39:9/動線関係なし:動線関係あり)ここで、動線以外のための操作について詳しく見てみると、視線だけのための抜けとトップライトとにほぼ二分される。つまり、展示空間にとって必要最小限の出入口以外の「視線の抜け」やトップライトによる「光」によって、閉じた一般的な展示室内に対し、より開放的な展示空間が意図されていると考えられる。

4. 展示空間の連結にみる面の役割と美術館の全体構成 エントランスや通路といった展示空間に至るまでに通過する空間を「つなぎの空間」と呼ぶと、各美術館は順路に沿った展示空間とつなぎの空間の連続として捉えることができる。ここでは、各々の空間同士における動線関係と視線的関係、建物全体での性格について考察を行

表4. 六面における操作の相互関係

		天井操作			
		トップライト (23)	無 (23)	吹抜 (2)	
立面操作面数	4面	D-01	垂直ライン強調 D-03 Ne-04 Ne-05		
	14面	水平ライン強調 T-02 S-04 Na-01	三面 Ne-01 M-02	部分 S-03 S-02 H-03	H-05 D-04
	3面	T-12 Na-03	トップライトと吹抜けが対応 Ne-02 D-06	T-13 T-14 T-11 Ne-03	側部切り欠き
	8面	T-05 M-03	H-04 T-01	T-14 T-08 H-02 T-07 T-04 H-07	吹抜け上部にトップライト H-01 Na-04
2面	H-08 D-05 Na-02 K-01	T-09 S-01 K-02 M-01	H-06 T-06 T-19		
16面	端型トップライト T-10 D-02 T-03				
10面					

表5 (動線) と (動線以外) の操作面数

[動線のための操作がなされている面数]	動線のための操作がなされている面数	動線と動線以外の操作によりつくられる		動線以外のための操作がなされている面数				
		0 (9)	1 (18)	2 (12)	3 (5)	4 (1)	5 (3)	
5 (1)	動線のみ							Ne-01 (1)
4 (1)	← →			D-01 (1)				
3 (7)	H-01 T-13	D-04 H-05	D-03 T-01				Na-01 (1)	
2 (24)	T-08 H-07 T-07 T-16 H-02	D-06 H-04 K-01 K-02 S-01 T-05 M-04 Na-02 T-15 T-04	T-12 H-08 Ne-04 Ne-05 T-11	Na-03 Ne-03			T-02 (1)	
1 (15)	T-14 H-06	M-01 T-06 T-03 T-09 T-10	D-05 D-02 Ne-02	H-03	S-02 S-03 S-04		M-02 (1)	
		0 (9)	1 (18)	2 (12)	3 (5)	4 (1)	5 (3)	
(動線以外)ののための操作がなされている面数								

う（図2）。隣接空間との動線的関係と視線の関係は面の抜けによりつくられると考え、それぞれの面の切り欠きや開口といった抜けにどのような意味や役割があるのかについて考察する。まず、2展示空間の関係において、面の抜けに対し代表的な7つの意味が見出された。ア・イは〈表面的〉や〈立体的〉といった形態で、動線とは関わらず、視線を操作し、「次の空間の存在を示す」という働きを行う。前者は表面的に隣接空間の存在を示すが、後者はより立体的な情報が得られ、隣室の空間を予感させるものである。ウは抜けに動線要素が加わり、「動線を見せる」というものである。またウ*のように出入口・ブリッジなどの動線要素が集まって一面を形成するものもみられた。エはア・イのような抜けに対し異なる床レベルを設けたもので、抜けの先の「空間を見下ろす、俯瞰的に見る」視点を持つ場所がつけられている。オは隣接空間に対して開口が設けられたもので、動線的にはつながらないが視線的にはつながり、隣接空間を「視覚の対象として位置づける」ものである。カは通常の「動線上の出入口」となるものである。この場合、視線も必然的に付加してくるが、積極的な視線のつながりとは異なる。キはクの「動線上の出入口が拡張」されたもので、カに比べ大きな面積の抜けを持ち、隣接空間との視線の連続が意識されていると考えられる。

さらに、抜けと抜けを重ねることで形成される複雑なつながりもみられた。ク、ケは隣接空間越しに次の空間が望めるものである。クは抜けのある面が平行に並び、奥へと視線を運ぶものであるが、ケは直交した壁の抜けにより2方向に視線が抜け、視線の曲折がみられた。コは抜けの重なる先に動線要素を付加したもので、空間越しに動線を見せるものである。またサは抜けの重なり異なるレベルが付加されることで、床レベルと開口レベルがそろい、眺望が可能となる場合である。サから派生したものにシ、スがある。これらはレベルが異なり開口の位置がずれることにより、視線が直進せず一度上下に触れてからその先をのぞむ。これらの場合は、外気に接した開口を持たない空間でも外部や明るさを感じられるものとなっている。以上のように視線のつながりに多様性があることが明らかになった。

また、動線（順路）と視線のつながりを重ね合わせると、動線と対になったつながりだけでなく、動線的にはつながりはないが視線的なつながりは持つといった動線上飛躍したつながり方があることも特徴である。それ

により、次の空間を示すことで期待感を持たせたり、一度体験した空間をもう一度違う視点から望むことができる場をつくり出している。

美術館全体では視線のつながり方より、視線が①1つの展示空間に集中するものと②奥行きを伴いリニアに連なっていくもの、③動線における前後をつなぎ2つの展示空間のみの関係にとどまっているものがあることが示された。また全体において、視線が集中する場所がロビーなどのつながりの空間ではなく、展示室であることも明らかになった。①の美術館に関して、視線が集中する部屋は周りとのような関係を持っているかに注目すると、豊田市美術館は、ア、イ、エが多いことから、周りの展示空間の存在を感じるが見通すことはできないという関係がみられた。またニューヨーク近代美術館は、豊田市美術館と同様に周りの展示空間の存在を示すのが多いのと同時にウ、キ、コなど動線を見せたり、動線のための入口を拡張させたりなど動線に関するものも多くみられた。②に関しては、どちらもクの要素をもつ部屋越しに視線が通るものが多くみられるが、豊田市美術館高橋節郎館では視線を曲げながら進ませるのに対し、丸亀市猪熊弦一郎美術館ではまっすぐに見通せるといった違いがみられた。さらに、トップライトと外部に開かれた大開口の配置関係をみると、端型トップライトは視線の集中する展示空間へと導く場合に多く、集中する展示空間には開口型のトップライトが多くみられた。さらに③のような美術館においては、閉じた展示空間と対照的に動線の最後に開放的な2方向以上の大開口を用いる場合が多く、その大開口に至るまでは端型のトップライトによって導かれていた。豊田市美術館の突き当たり位置する展示空間には、その部屋だけで完結したトップライトがみられ、暗所から明所へ導くという明暗の流れが美術館全体を通して行われていることが明らかになった。

5. 結

以上より、谷口吉生の美術館における展示空間の設計法を展開図より考察することで、展示空間における各面の特徴的なつくり方を見出し、それらが動線のための開口よりも視覚的な空間の連結の方に、より重点をおいて設計がなされていることが明らかになった。視覚的な操作に関しては、面の抜けの形状からそれらの配置の仕方までを様々に組み合わせることで、一見すると単純な構成でありながら、様々な役割をもった展示空間のつながりをつくりあげていることが明らかになった。

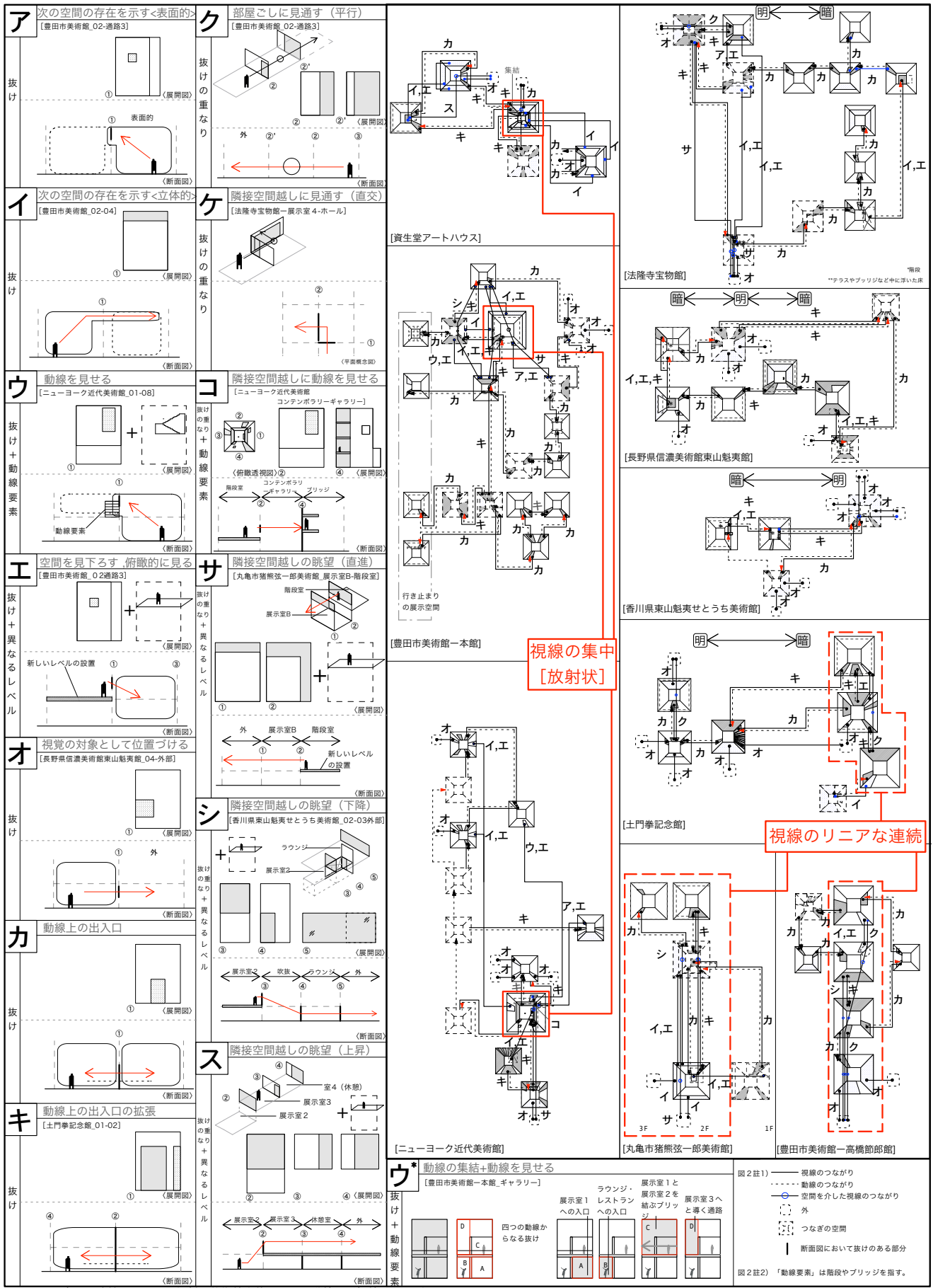


図2 展示空間の連結に見る面の役割と美術館全体における動線及び視線のつながり

視線の集中
[放射状]

視線のリニアな連続

ウ 動線の集結+動線を見せる
【豊田市美術館-本館_ギャラリー】

ラウンジ
展示室1と展示室2を結ぶブリッジ
展示室3へ導く通路

展示室1への入口
展示室2への入口

四つの動線からなる抜け

図2註1) — 視線のつながり
- - - 動線のつながり
- - - 空間を介した視線のつながり
○ 外
○ つなぎの空間
| 断面図において抜けのある部分

図2註2) 「動線要素」は階段やブリッジを指す。